参考資料（会長私案）

計画の進行管理について

１　前回の計画改定後の審議会での議論

これまでに当審議会において、文化芸術の分野の取組については、数値目標だけで評価するのではなく、数値によらない部分も含め、達成度や事業の質、内容等を検証していく必要があるのではないかという議論がなされてきた。

それを受け、共生共創事業を例として採り上げ、目的（最終アウトカム）を達成するに至るまでの論理的な因果関係を明示した「ロジックモデル」を作成することとした。

２　ロジックモデルを作成することの意義と課題

共生共創事業については、最終アウトカムの実現に向け、障がい者向け、高齢者向けなど多岐にわたる事業を展開しており、鑑賞者数等の数値の推移だけでなく、満足度や関係者の声といった色々な視点から、総合的に事業全体を検証していくことが必要になる。そのため、ロジックモデルを作成し、全体をまとめて評価をすることにより、現時点での達成状況が可視化されるという利点があった。

一方で、共生共創事業以外の事業については、同じ目的の複数事業をまとめて総合的に評価することで、達成度等を評価していく必要があるような、ロジックモデルになじむ事業がほとんどなく、ロジックモデルを作成するための作業負担に見合う効果が期待しにくいといった課題がある。

３　今後に向けた課題

共生共創事業についてロジックモデルを作成してきた成果を踏まえ、次期計画改定を視野に、例えば現計画が約３年経過する時期を目途に、KPI の目標値として設定しているもの以外の主な取組・事業についても、数値以外の定性的なものも含めた中間総括をすることができないか検討していただきたい。